

## 拡大する社会的ネットワークは少数派を残存させるか？

### - Dynamic Social Impact Theory における非近接他者情報の導入 -

志村誠<sup>1)</sup>・小林哲郎<sup>1)</sup>・村上史朗<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>東京大学大学院人文社会研究科 <sup>2)</sup>神戸大学大学院文化科学研究科

【問題】 本研究の目的は、ICTs (Information and Communication Technology)による社会的ネットワークの変化が、社会の意見分布に及ぼす影響を検討することである。Latané(1980; 1994)は、人は自分と物理的に近い他者からほど、大きな影響を受けやすいとする Dynamic Social Impact Theory (DSIT) を提唱して、多数派少数派といった、人々の意見分布がどう変化するかを検討している。

しかし、近年の急速なインターネットの普及と ICT の発達に伴い、コミュニケーションにおける物理的制約や、新しい関係を築くことに対するコストが著しく低下しつつある。そこで本研究では Latané のモデルを一部アレンジして、非近接他者との紐帯を加えたモデルを提案する。ICT による非近接他者との接触増加により、少数派が残存するために必ずしもクラスター化する必要はなくなる。少数派は周りに同じ意見のものがいなくとも、離れた少数派同士が結びついて残存することが可能となるのではないか。以上のような予測の下で、シミュレーションを行った。

【方法】 40×40 の torus 型ネットワークにエージェントを 1600 配置した。各エージェントはそれぞれ 1 か 0 かの意見を持ち、自分の上下左右の 4 人に加え、非近接他者からの影響を受ける。近接他者 1 人と非近接他者 1 人の持つ影響力は同じとする。操作した変数は以下の 2 つである。(1)1 の意見を持つエージェントの割合を 0.10 から 0.50 まで 0.05 刻みに変化させ、(2)紐帯の本数を 0,800,1600, 2400,3200 の 5 通りに変化させる(各エージェントが平均で 0,1,2,3,4 人の非近接他者を持つ)。以上の 9×5=45 条件について検討した。

【結果】 シミュレーション終了時の少数派残存率を、少数派の初期出現率ごとに並べたものが、図 1 である。非近接他者との紐帯数が増えるほど、残存率が低くなっているが、その幅はわずかであった。次に残存クラスター数の変化を示したのが、図 2 である。紐帯数が増えるほど、クラスター数も増えていた。

【考察】 結果は予測通りで、ローカルな少数派が非近接他者との紐帯により態度を維持できるといえる。

またマクロな視点に基づけば、少数派残存においてはクラスタリングが必ず起こるのではなく、Latané と比較しても少数派多数派が入り混じっていた。

しかし現実の社会において、非近接他者との紐帯は、より選択的に選ばれているものと考えられる。そもそも重要他者が自分と同じ意見を持つ可能性が高い、と考えるのは自然であろう。また ICT のもたらす変化は既存のネットワークを強化するに留まらず、新たなネットワークを創出する。インターネットは検索性が高く、自分と同じ立場の人を容易に探すことができるという点でも、少数派のネットワーク形成に大きく役立つ。サポート研究においても、聴覚障害者のように、オフラインで同じ境遇の人が圧倒的に少ない人が、オンラインで強いネットワークを形成することが示されており(Cummings *et al*, 2002)、そのネットワークが意見分布の変化につながる可能性を示唆している。

平均非近接他者紐帯数: =0 本, =1 本, =2 本, ×=3 本, =4 本

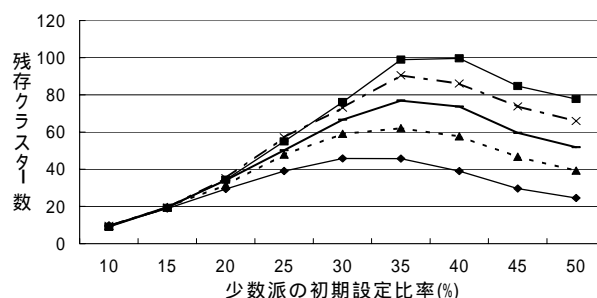


図 1: 少数派初期設定比率による少数派の残存率の変化

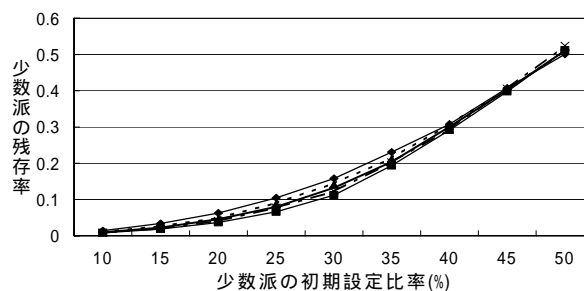


図 2: 少数派初期設定比率による残存クラスター数の変化